



17 オオカミとキツネ

(グリムの昔ばなし)

「赤ギツネよ、わしになにか食べ物を持ってこい。さもなければ、おまえを食っちゃうぞ!」

オオカミは家来にしている弱いキツネを脅しました。

キツネは、子ヒツジを何匹も飼っているお百姓の家へオオカミを連れていきました。

キツネはそのうちの1匹をぬすんでオオカミに渡し、自分は先に帰りました。

食いしん坊のオオカミはもう一匹食べようと自分でぬすみに行きましたが、お百姓に見つかって、こっぴどく打ちのめされました。

次の日もオオカミはキツネに食べ物を探させ、同じように失敗してひどいめにあいました。

三日目もオオカミに脅されたキツネは、ある家の、塩漬けの肉がたくわえられている地下室へ、抜け道を教えながら連れていきました。

オオカミがたんまりとある肉をたிரらげているあいだ、キツネは用心深く入ってきた穴を出たり入ったりしていました。

ついに、物音に気づいた家の主がやって来ました。キツネは入ってきた穴からあつというまに逃げ出しました。

オオカミも後を追いましたが、食べ過ぎてふくれたおなか穴につかかえて出られず、とうとう家の主に退治されてしまいました。

食いしん坊のオオカミから解放されたキツネは、森に帰って大喜びしました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

ふくらんだ欲が、出口をふさぎました。

●人間が見たオオカミ。

「オオカミとキツネ」に登場するこのオオカミは、たいへんな欲ばりで間が抜けています。ヨーロッパの昔ばなしでは、「赤ずきん」「三匹のこぶた」のように、オオカミはいつも悪役。しかし日本の昔ばなしではそのような話はほとんどありません。逆にオオカミを神格化した「オオカミの眉毛」や、人間を助けてくれる「送りオオカミ」などの昔ばなしがあるほどです。また、日本各地にはオオカミをまつる神社が20社はあるとか。この昔の人のオオカミ観の違いは、宗教的な理由などもありますが、主にヨーロッパ人は牧畜民族、日本人は農耕民族だったことに由来します。大切な羊を食べるオオカミと、大切な作物を食い荒らす害獣(イノシシ、シカなど)を食べてくれるオオカミ。同じ生き物でも、その見え方はずいぶんと違っていたのですね。

●オオカミという生き方。

昔ばなしでは圧倒的強者として描かれるオオカミ。しかし実際のオオカミの生存競争には、自然の驚異を感じます。オオカミは、バックと呼ばれる家族単位の群れで生活し、深い絆で結ばれています。逆に群れどうしのなわばり争いは他の動物より激しく、死者がでるほど。この争いを避けるため、なわばりどうしは地域の20~40%にもなる面積の緩衝地帯で、広く離されています。さて、婚姻期のオオカミはバックを出て、緩衝地帯を縫うようにパートナー探しの旅をします。これがいわゆる“一匹狼”。強そうですが、運よくパートナー

(他の一匹狼)に出会う前に、他のなわばりに入れれば殺されてしまうわけで、実は弱く心細い状態です。ある調査では一匹狼の生存率は50%以下だったとか。この習性は、オオカミ自身で数が増え過ぎないように調整しているから、という説もあります。食物連鎖のバランスを保っているのですね。オオカミは知っています。強者もルールを守らなければ身を滅ぼすということ。

●ついつい食べてしまうナゾ。

「オオカミとキツネ」のオオカミのような、度を過ぎた食欲。その仕組みはどのようなものでしょう。「ドーパミン」は、脳内に分泌されると元気や快感を感じ、また、不足することによってパーキンソン病になることが知られるなど、人間にとって重要な神経伝達物質の一つ。そしてドーパミンは脳内の空腹中枢も刺激するので、食欲も増大させる働きがあるとか。ところが、このドーパミンは、外部からの情報刺激ですぐに分泌されてしまうそうです。グルメ雑誌に載るおいしい店やお菓子のパッケージなど、現代は、刺激の原因となる情報量が非常に多い社会。「ついつい」食べてしまうのは、このドーパミンがいろいろな情報で過剰に分泌され、不自然な食欲が起こるから、という説も報告されています。これは、体内の糖分不足を知らせる信号など、生存本能からくる食欲とは別もの。オオカミも、キツネにおいしい情報を一杯食わされたようですね。

昔ばなし監修/白百合女子大学教授 小澤俊夫
取材協力/東京農工大学教授・日本オオカミ協会会長 丸山直樹